梅園学会ニュース
2012.5
No.155

梅園の魅力は天の視点の貫徹

ここにいう天とは言うまでもなく天人の分の天です。天人の天は無意、人は有意ですから、ここに言う天とは自然そのものという意味です。

すべてのものをそのものの天において把握したいという志向は梅園が一貫して持っていたものでした。「麻田剛立ニ与ふる書」の中でかの酒や酢や醪や醴は皆米から造られたものであるが、米からその醸成を求めずして各自が自己の嘗めた酢や醴の美味によって米の面目を尋ねる。世に謂ふ諸子百家の説、汗牛充棟の書もこの類である。」（田口正治訳『三浦梅園』人物叢書、213頁）と言っているように、あくまで酒や酢や醪や醴から米そのものに至る。米そのものを突きとめるのが梅園でした。突きとめたら、米から逆に酒や酢や醪や醴が醸成される過程をも説明してみせる。

あらゆる現象の中に一元気（一）そのものを見抜く、一元気の一即一一、一一即一のはたらき、運動を見る。一元気（一気）が会易（一一）に顕現（粲立）し、また一元気に混成する一即一一、一一即一の条理運動によって宇宙・天地が成立しているさまを叙述したのが『玄語』であるのですが、酒や酢…から米そのものを見る目は、あらゆる現象や現実の中に一元気そのもの（一即一一、一一即一）を見る目であり、天そのものを絶えず見ようとする梅園の視点でした。

自然現象を見るこのような視点は有名であり、梅園の魅力の最大のものは物事の根源にあくまでも迫ろうとするその態度です。

しかし、同じ視点が社会や人間を視る所でもすべて貫かれていたことは余り気づかれていません。本ニュースの前号でとりあげた富貴観の革命的転換もその一つです。富貴と言えば金持ちであり身分や地位が高いことです。これが社会通念常識としての富貴です。天人の分をあてはめれば人（有意）としての富貴（観）です。しかし天（無意）としての富貴（観）が別にありました。前回紹介しました安東省庵やそれに佩服した梅園の富貴（観）です。

「求むる無き、これ至貴、足るを知る、これ至富」（省庵）

「天下大ト雖モ足ルヲ知ルヨリ富メルハ莫カラン。」（原漢文 梅園「知足解」。前掲田口著97頁）

後者は梅園26歳の文といいます！（同上）

実は、前号に続き、今号は学会委員の矢野香代子さんに一文を草してもらいました（二枚目後半）。そこで紹介されている梅園の詩「答人」を解説している田口正治先生の人物叢書『三浦梅園』263頁から268頁を再読しているうちに、有名な「述志」の長い序文の中で梅園がいわゆる身分社会を反観していること 天人の分で分析していることに気づかされました。

以下それをとりあげます。

身分社会の反観

上なる者は贅を尽しているが、苦労も多い

先ず原文を読み下し体で示し、その後で大意を取ることにします。

「今の世唯だ上なる者人に奉ぜられ、下なる者人に役せらるるを観る（のみ）。然れども上なる者常に遑遑として（忙しいさま—注）芻と牧を索めて以て我を保ち我を養ふに役す。ここに於てか、我、宮闕輿馬、粉黛肥甘の悶悶たる者を彼に推し、之をして暴客を禁じ、災眚を警めしむ。施施然たり、陶陶然たり、未だその孰か優なるかを弁ぜず。」

「芻と牧を索めて我を保ち我を養ふ」とは為政者の牧民、民の安全を守り、民をやしなう、為政者の仕事を指しています。

上の者は立派な宮殿や屋敷に住み、外出には車や馬を使い、美しい女性を沢山侍らせ美味な食事をしていますが、その反面犯罪の取り締り（治安）や災害を防ぐなど多くの苦労がある。一方、下なる者（民）はそのような衣食住の華美なものは享受できないが、施施然たる、陶陶然たるゆったりとした気分や気楽さがある。どちらが優っているか、自明ではないか、というのです。

今回述志の序と詩を再読してみました。梅園59歳のときの長い序文と詩は意外と難解でした。読書ノート（浦子手記）「又乙二梅園詩稿」末尾にある「述志」をも参照してみましたら、刊本『梅園詩集』下巻や梅園全集下巻に載る「述志」と大部異同がありました。

述志の初稿では上記引用部分の次にわかりやすく次の指摘がありました。

「我は彼の逸する所に労し、彼の労する所に逸す」（「我労于彼之所逸、而逸彼之所労。」）まさに反観です。

初稿で注目すべき所は爵徳理解に孟子の影響が色濃く出ていることでした。

孟子の天爵・人爵論の影響

「孟子曰く、天爵あり、人爵あり。仁義忠信、善を楽んで倦まず、これ天爵なり。公卿大夫、これ人爵なり。古の人はその天爵を修めて、人爵これに従ふ。今の人は、その天爵を修めて以て人爵を要む。既に人爵を得て、その天爵を棄つ。則ち惑ひの甚しき者なり。終に必ず亡びるのみ。

孟子曰く、貴きを欲するは人の同じき心なり。人人己に貴き者あるも思はざるのみ。人の貴ぶ所の者は良貴にあらざるなり。」（告子上篇）

右に言う人爵とは高い地位のことです。富貴の貴に当ります。これは望んでも必ずしも得られないものです。しかし徳は誰でも求めて至ることができるというのが、改訂「述志」の指摘です。しかし初稿「述志」では己の中にある貴＝「良貴」（本然の善）を根拠にして仕官を断る根拠にしています。

梅園学会ニュース155号(続き)

「天下に尊き者あり。爵あり、徳あり。故にその我に貴き者と我に富む者とを以てすれば、則ち王公も以て我より尊ぶこと能はず、亦た以て我に尚(加)ふること能はず。苟もかの天賜を舎てて以て人に趦趄(ししょ)し囁嚅(しょうじゅ)すれば、則ち豈に彼の蒼々に怍(は)じざらんや。」
(初稿述志)

「その我に貴き者」とは上に引用した孟子の告子上篇にある「人人己に貴き者あり」の「良貴」です。

梅園が26歳のときに書いた「知足解」を全集下巻(781頁)を再読してみました。

(矢野香代子さん近影)

「一旦金紫簪纓より挽き、声色富貴後より推す、安んぞ澹然(たんぜん)として心を動かさざるを得んや。千賞左にあるも盲の如し、美誉右にあるも聾するのごときもの、能く幾人あるか。ここに於て従容(しょうよう)として富貴の岐(みち)に趨(おもむ)かず、義にこれ与(とも)に比(したが)ふ、足るを知る者と謂ふべし」

金紫とは金印と紫綬。転じてそれを帯びる者 即ち高官や貴族と辞書(広辞苑)にあります。

「千賞在左如盲、美誉在右如聾。能有幾人乎。於是従容不趨於富貴之岐、義之与比、可謂知足者矣。」

物凄い誘惑の中でも、いつも義と共にあって不動心である、これこそ足るを知る者であるという認識に達していたのは梅園26歳です。前年玖珠(くす)藩主久留島光通より召(め)されしも謝絶した梅園でした。述志は59歳の時の作ですが、梅園は25歳の頃宮仕(みやづか)えはしないという確乎(かっこ)たる考えを持っていたことがわかります。

「義之与比」は孔子の言葉(論語 里仁篇)ですが、この中にある富貴観は孟子から強い影響を得ていたことがわかります。梅園における富貴観の革命的転換は孟子に依拠していたことが、「述志」を通してハッキリしました。天人観も孟子の影響大ですね。

天賦の分(天分)の考え

梅園が25歳のとき己が分と自覚したのは天から賦された分の自覚でした。「甲乙丙丁、天賦己宗(ジ)(ル)。所守即分。分乃(チ)己(ガ)所(ニ)職務(トスル)一之地也」(改訂述志)

梅園は小さいときから従事していた自然のしくみの探究の仕事を自分の「分」と自覚しました(三代つづく医者の仕事も含めてか。)。祖父や父から学んだ仁恕(じょ)(おもいやりの心)を大切にし、足るを知ることを自らの富貴観とし(孔孟から学びました)、これも(含め)自己の天分(「分」)と自覚しました。彼を慕ってやってきた塾生たちにも各自の才能を見つけるように指導しました。

述志の詩の冒頭も今や意味がハッキリつかめました。「金(大切なもの、自分の「分」)を大鐘(おおがね)の中にくべるような者がいるだろうか。問うまでもない。断じていない。私は自分の分を守る」。

(文責 小川晴久)

桔槹(はねつるべ)のある「梅園哲学の庭」

矢野香代子

前号の浜田晃氏の文で来る2023年が三浦梅園生誕三百年に当たることが紹介されていました。来るべき三百年の節目を目前にし、梅園人気の復活のために少し提案をしたいと思います。

梅園と我々を隔てているのはその主要な著作が漢文だということ、大正元年(1912年、今年は刊行百周年)に発行された『全集』以外の翻刻がまとまった形で刊行されていないことではないでしょうか。次の百年に向けて誰もが読める『新・梅園全集』の刊行が期待されます。

私は安岐町の生まれで、いわば地元に生まれた者の責任のようなもので、梅園に興味を持ち、勉強しはじめましたが、深淵で高遠な対象を選びすぎたかなと、ジレンマもあります。漢文も、崩し文字も苦手です。「変体仮名」というかな文字の存在を知ったのも梅園学会に入会してからです。

梅園の里の正面入り口に、三浦梅園を顕彰する立派な石碑が立っているのを皆様もご存じだと思います。

「樵蹊不與世間通。高臥東山異謝公。占得煙霞吾已老。清風鶴唳白雲中。」

梅園学会に入会してはや10年。梅園学会の開催で毎年秋に訪れるたびに、どこまで読めるか確認するのが、私の梅園理解のバロメーターになっています。田口正治著『三浦梅園』(吉川弘文館)を頼りに原文を探ってみました。梅園先生59歳の(1781年)中津・小倉の旅を漢文の詩集にした『春遊草』の冒頭にあります。この石碑の漢詩に読みと内容説明のプレートを!と強く願います。もっとも地元の人たちは「聘を謝す」という題で、長年詩吟でこの詩に親しんできたようです。今は廃校になった西武蔵小学校での「梅園祭」で私も一度聞いたことがあります。祖父母から子へ、子から孫へと継続=「鱗比」(親→子→孫と時間的な連続)プロジェクトとして活動を続けて行って欲しいものです。

説明プレートは、梅園の撰や書になる神社の鳥居銘をはじめ、梅園関連の史跡すべてに設置してほしいです。WEBサイトと連動するもよし。会員諸氏のこれまでの研究の成果をまとめれば、出来ないことはありません。是非、国東市の予算に組み、この作業を梅園学会に依頼して下さい。

そしてもうひとつ。梅園は譬え(モデル)を使った説明をよくします。従来方円といっていたのを直と円こそが自然だとする直円の発見があり、天地は直円だといいます。直円を備えるものとして、桔槹・いがぐりの球(栗毬)・車輪・人の眼(まっすぐな視線と丸い眸)などが登場します。地球の譬えが、いがぐり(いがの直線が集まり丸い球になっている)と車輪(丸い車輪と直線のスポーク)です。これらはすぐにイメージできますが、「桔槹」の直と円は想像が困難です。なぜなら一度もみたことがないからです。年配の方ならともかく多くの人がそうではないでしょうか。

梅園庭の井戸に桔槹の仕掛けを作ってください。実際に水を汲んでみることで、直と円と体感し、『玄語』の根底にある「直円」と「一即一一」の法則を駆使して梅園が考えたように自然を考えてみるのが、梅園理解への近道かもしれません。天(円なる円)と地球(直も円)を、時間と空間、道徳、人の知力と行動までも、直と円で説明してしまいます。「一即一一」つまり「条理」の哲学は我々に自分の力で考えよと示唆します。冥々なる「一」(合・全体)も、昭昭たる「一一」(反・反の個々の現象)をもってすれば解明できる、と。